

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優

(聞き手＝小峯隆生・筑波大学非常勤講師)

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第十一回

信頼について考えてみる

佐藤 今回は「信頼」ということについて学んでいきましょう。

そもそも「信頼」とはなんですか？

今日、私はこうして講座のゲストとして事前に連絡いただいた時間に、この教室に来ました。でも、ここに来なかったかもしれない。別段取り立てて、契約書を交わしたわけではありませんね。

にもかかわらず、皆さんは、この教室で私を待っていてくれました。どうしてですか？

——それは、佐藤さんが、この時間に来てくれると思っているからです。そういう前提というか、まさに「佐藤さんは来てくれる」と信頼しているからです。

佐藤 では、私を信頼する根拠はなんですか？

——いや、それはだって、佐藤さんと私のこれまでの関係から、これまでの付き合いの中から……。

佐藤 はいっ、ストップ！ いま言葉にした「これまでの」がポイントです。「これまでの」という部分に「時間」の概念がすでに入ってきていますね。

——確かに。

佐藤 「これまでの」という過去という時間の概念。また、ある人物を信頼するという行

為は、信頼を寄せたその人物が、将来にわたり自分に対して有益である。そうした未来を念頭においているのです。その目的に即した、合致した特定の人物に対して、人は特別な思い入れをします。

つまり「信頼」と「時間」は密接な関係を持っています。「時間」に関しては、大きく分けて3つです。過去、現在、未来の3つです。

――なるほど。その3つのどこに重心をおくかで、大きな違いが出てきそうですね。

佐藤 木村^{びん}敏さんの書かれた『時間と自己』（中公新書）という新書が参考になると思います。小説家、物理学者、数学者で大きな業績を残す人々は、基本的に「未来」に重心をおいていますね。

対して官僚などは、「過去」に重心をおいています。

――確かに、前例がない、事例がない、以前はどうだったか、など全部過去ですね。

佐藤 官僚の中でも、とても几帳面な人に見られるケースですが、過去の自分の仕事や現在において、その成果なり結果が芳しくないと、「ああ、なんであんなことしてしまったのか？」「ああ、なんて取り返しのつかないことしてしまったのだろう……」といつまでも過去に囚われてしまって、今に集中することや、未来に目を向けることができなくなってし

まっているケースが見受けられます。そんな人が官僚には多いのです。

——そんな人たちが携わる国政って大丈夫なのでしょうか？

佐藤 大丈夫じゃありません。

——最近の政治に対する国民の信頼は低いですね。よくニュースとかで、政治家をバカにしたりするような発言をする人たちも見かけますが……。

佐藤 確かに、テレビニュースなどの街頭インタビューで、よく自国の政治家をバカにしたような発言をする人がいますが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）を著したマックス・ウェーバーはこう言っています。「政治家の水準は、その国の国民の平均的な水準から著しく乖離することはない」と。

今の日本の政治の現実を見れば、日本の社会や国民が、どういう病理に^{かか}羅っているか、よくわかります。政治家は国民水準を映し出す鏡みたいなものなのです。

さて、政治の世界では、「信頼」がとても重要な要素になります。こいつは信頼できる、あいつは信頼できない、といった判断を常に求められます。そこを見誤ると、その政治家の死活問題に直結します。

多くの政治家は、次の選挙のために、いつも走り回っています。酒を飲んだり、あちこ

ちの集まり、冠婚葬祭に顔を出したりしては、人間関係をつくっています。そうしたことに時間を割くわけですから、細かなあれこれを勉強をしたりする時間的な余裕がないのが実情です。

——政治家がそんなに忙しいのなら、国の統治なんておぼつかないのではないのでしょうか？

佐藤 その手法がニクラス・ルーマンの『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』（頸草書房）に著されています。

ここでは、アメリカの連邦予算の作成においての連邦議会の議員と、その行政の職員（官僚）の関係を挙げて説明しています。

アメリカの国家行政の現実是非常に複雑で、一人の議員がそのすべてを把握することはできない。議員は行政の細部を統括している行政官（官僚・公務員）を信頼して任せることにより、国政を進めている、というようなことが述べられています。大ぐくりで見れば日本の場合も同じ形態です。政治家は、官僚を信頼できるか否かを判断し、間接的に国政を進めているのです。

ルーマンはさらに、政治家は、その信頼していた官僚に、ちょっとでも不誠実な徴候が見られると、信頼するのをやめたり、非常に感情的な行動に出たりすると述べています。

日本でも政治家が官僚に対して「俺は聞いていない！」「なに嘘をついているんだ！」と烈火のごとく怒るケースがよく見受けられますが、まさにルーマンの指摘の通りだと思ひ

ます。でも、ルーマンは、「嘘をつく」ことを否定はしていません。

——えっ、嘘ついたら、それこそ信頼を失ってしまいませんか？

佐藤 Aさんは嘘をついてもCさんからは信頼されている。Bさんは、嘘をついているつもりはないのに、いつもCさんから誤解されたり、怒られたりする。

AさんとCさん、BさんとCさん、彼らの間にどんな関係があるのでしょうか。

CさんとBさんの間に信頼関係は存在しません。

CさんとAさんの間には、信頼関係が存在しています。

仮にAさんに裏切られたとしてもCさんは、Aさんには何か嘘をつかなくてはならない特別の事情があったのだらうと好意的に解釈し、Aさんへの信頼は変わらないことがよくあります。実は、Aさんを信頼してしまったCさん自身の評価が、低下することをCさんが恐れているから、心理的に自己防衛の動きが起きているのです。

だから、CさんとAさんの信頼関係には、ある程度の幅が存在しています。些細なことまで、いちいち気にしていたら、CさんとAさんの信頼関係は成り立ちません。

——幅があるにしても、信頼が保たれるか、崩れるかの境界線みたいなものって、どこかにひかれているんですかね？

佐藤 その線がどこにあるかは、その人間同士の社会の文化、その時の状況、過去の積み

重ねなどで、変わってくるでしょう。

いくら、信頼しあった仲でも、その線を越えた場合は、当然、信頼の構造は崩れます。

政治家と官僚の間では、この線を越えること以外に、信頼関係の崩れる場合があります。

——どんな場合ですか？

佐藤 政治家が勉強して、信頼している官僚の専門分野についての知識に詳しくなる時です。政治家が、その分野の知識を身につければつけるほど、官僚は不要になります。これまでであった信頼関係は必要なくなります。

流れを整理すると次のようになります。

政治家が、「この人は、私の知らないことを知っているから任せよう、信頼しよう」と官僚に頼る。このとき、この官僚に裏切られるかもしれないというリスクが生じるが、政治家はそのリスクも含んだうえで、その官僚を信頼する。しかし、政治家がその官僚の専門分野に精通すればするほど、当初信頼されていたその官僚は、必要なくなる。政治家が政治を進めるにあたって、実行役はもはや、彼でなくてもよいという状況が生じてくるわけです。

——この政治家と官僚の信頼関係、われわれの日常生活にも当てはめられそうですね。

佐藤 一概にそうとも言えません。

信頼には、様々な信頼が存在するのです。ルーマンも様々な信頼が存在し、それらをすべてイコールでつなぐことはできないと述べています。

――さまざまな信頼？ 信頼は、信頼ではないのですか？ 信頼は一つではないのですか？

佐藤 Dはいい飲み友だちで、信頼しているけれど、通訳を頼むとなったらDの語学力では心配だ。Fは情報収集能力に長けているが、文章力はいまひとつなので、文章は別の人間にお願いしたい。

戦略的な信頼、打算的な信頼、仕事上での信頼と日常生活での個人的な信頼、さらには信頼のレベルなど、さまざまな信頼があり、一つにはできないのです。

――なるほど。

佐藤 ルーマンは、最後にこう締めくくります。「信頼は、世界を成り立たせている唯一の基盤ではない。けれども、かなり複雑な社会が成立しなければ、高度に複雑でしかも構造化された世界を表象することはできないし、また信頼が存在しなければ、高度に複雑な社会を構成することはできないのである」と。

私は、この結論に完全に賛成です。

いまの日本社会は、社会的な信頼のレベルが落ちています。政治の世界、学問の世界で

も。それ以前の学校のいじめ問題において、昨今の報道からも明らかなように信頼のレベルの低下は見て取れます。

このような国内的な問題は、必ず外交関係に反映していきます。

韓国を見るとわかりやすいかもしれません。韓国は、徹底的な新自由主義政策を推進してきました。株主の多くは外国人で、韓国の利益の相当な部分を外国人に持って行かれています。そんな状況の中で独^こ楽^ま鼠^{ねずみ}のように韓国人は働いています。

そのうえ、徹底した競争社会です。子供をエリートにするには、早くからバイリンガルにしなければならないので、お父さんはソウルに残って、お母さんと息子が、米国に留学している、そんなことが常態化しているのです。

——そんなんじゃ、競争、競争で人間関係はいつもギクシャクしていて、信頼関係なんて、生まれにくいですね。

佐藤 そうです。ある限定的な空間の中で競争する。1位になった者が、賞品を総取りという新自由主義のゲームのルール。

このルールで、学校での学力競争、企業内部の出世競争、全てでそうなったら、そこで信頼は育ちますか。

本来、信頼を育くむはずの空間が、相手を裏切ってでも勝ち抜いていく空間へととなっているわけです。

これは、賭博の世界です。

この賭博世界が全社会に拡大したら、社会の信頼レベルは著しく落ちるでしょう。

外交の世界にこれが反映されると、相手を信頼できなくなってしまいます。

韓国大統領が、日本からの親書をなぜ受け取らなかったのか？

その親書には、『竹島』という文言が必ずある。その文言がある文書を受け取ったら、竹島に領土問題があることを認めたと日本にとられるのではないか？

不信の原理がはたらいているのです。

——それを払拭するのは、とても大変なことではないでしょうか？

佐藤 そのためには、信頼はどのように生まれてきているのか？ 生まれた信頼をどのように構築していくのか？ それを考えていかなければなりません。

皆で生活する社会の中で、構築された信頼を、ある時は過剰に消費してみる。

「あいつ、ちょっと不安だけど、信じてみるか」

とか、

「何か嘘をついているようだが、これくらいだったら、許してやるか」

といった事柄を積み重ねることで、信頼の閾値いきちが強く、広がっていきます。

それによって、システムが強固になってくる。

これこそが、ニクラス・ルーマンの述べている「信頼の作り方」につながるのです。

—われわれは、どうしたら、いいんでしょうか？ 相手を許す気持ちですか？

佐藤 それも重要ですし、なによりまず、自分の目に入る範囲、手に触れられる範囲、といった具体的な所から信頼を強化する作業をしなければならないでしょう。

—国の問題、国家間の問題を変えていくための信頼関係は、まずは自分の隣から、ということですね。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

『時間と自己』

木村敏著（中公新書）

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

マックス・ウェーバー著／大塚久雄訳（岩波文庫）

『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』

ニクラス・ルーマン著／大庭健・正村俊之訳（頸草書房）